

空気感とフック、あるいは韻律への覚書

平井太郎*

1. アクション・リサーチという方法

本稿では、大学における教育・研究・社会貢献を通じたフィールドとの複合的な関わりを、アクション・リサーチの観点から再記述することで、アクション・リサーチという方法の問いの中核にある「コミュニティ」のありようについて考える。

アクション・リサーチとは、戦後直後K・Lewin (1948) により提唱された方法で、その後、組織科学などに取り入れられ教育、医療、地域開発などさまざまな分野に応用されている。Lewinが問題にしたのは、人びとが小集団small groupをなすとき、個々人に分かれていたときとは異なる能力や意識を帯びること、さらに、そうした現象が人びとを小集団として把握しようとする、あるいは、人びとが小集団を形成するのを促そうとする研究者の働きかけと不可分であることであった。

わかりやすい例が、同時代によく知られた「ホーソーン効果」である (Mayo 1945)。工場の生産性向上を図るための研究であったが、もっともそれに寄与したのは、「観察されている」という従業員の意識であり、かつ従業員どうしが自由にそれを会話できることにあった。この知見は、その後、根本的な追試もなされるなど議論を呼びつつも、(1) 小集団形成の効果、(2) 実践と研究の不可分な影響関係という問題提起そのものは、現在まで受け継がれている (金井ほか2010)。

では、何のためにこうしたアクション・リサーチを展開するのか。これにはいくつか議論のし方がありうる。野村 (2017) のように、研究上とられる認識論 (実証主義／批判的实在論／解釈主義) としての一貫性から要請されるという議論もありうる。だが、野村 (2017) 自身、アクション・リサーチはどの認識論からも導き出しうるとしているように、そのように普遍的な正統性以上に歴史的な意義を強調する議論もありうる。

たとえば、「応用社会学」を提起したLazarsfeld (1975) である。そこでは、核開発をはじめ高度化する研究成果が実社会に甚大な影響を与えることがしばしば見られる状況下では、実践と研究との相互関係を問うことが要請されるとされていた。こうした議論の立て方は、比較的近年、分野横断的に提唱された「公共×学」(菅2013、盛山2015など) や科学技術社会論 (松本2012など) にも通底する、重要な視点である。しかもLazarsfeld (1975) はまさにアクション・リサーチについても吟味している。まず、実践と研究との相互関係を問う先駆的なアプローチであったと評価したうえで、Lewinに続く研究者がその射程を安易に「小集団」から拡張していると危惧するのである。

こうしたLazarsfeld (1975) の問題提起に呼応すると考えられるのがStringer (2014) の議論である。そこでは、現代社会において解決すべき問題は複雑化しているにもかかわらず、研究も実践も専門分化しそれに十分応えることができていない、だからこそ、分化した専門性の壁、さらに研究と実践の壁を越え、当事者が共同して知識を生産することが求められている、そうした営みがアクション・リサーチなのだとする。このStringer (2014) によるアクション・リサーチの位置づけは、Lazarsfeld (1975) の問題提起を共有しつつ、実践と研究を横断する「小集団」形成がなぜ要請されるのかを一連の論理で導きうる点で魅力的である。

* 弘前大学大学院地域社会研究科 地域文化研究講座 准教授

そこで本稿でもこのStringer (2014) の位置づけにしたがう。その際、問題になるのが、そこで「小集団small group」に当たるものとして「コミュニティcommunity」が用いられている点である。こうした用法は、現代の英米圏ではDelanty (2018) も注意するように、日本語の「コミュニティ／共同体」がまとうような「地域性と共同性」(似田貝1988) といった二大要件を抜きにした、「帰属についての自由なコミュニケーション・システム」あるいは「近接性が見られる対話的空間」といった定義が、ある程度、定着していることと関係している。とすれば、Delanty (2018) はそこまで踏み込んでいないが、現代のアクション・リサーチにおいては、「自由な」、すなわち機能分化の壁を越えたコミュニケーションを通じ、複雑化する問題の解決、あえて言い換えれば、「帰属belonging」あるいは存在beingを確かなものとする知識の共同生産をこそ、核心的な目標としていると捉え直すこともできよう。

このように敷衍したうえで本稿の文脈上、注目されるのが川瀬 (2019) である。ここでは、中国・南京近郊の農村集落をフィールドとして、理論・分析枠組みとして自身が用意していた「共同体」像——まさに「地域性と共同性」を要件とする閉鎖的な関係集合——が、人びとの営みと向き合うなかで次々と裏切られ、最終的に、言語学の「韻律prosody」概念を導入することで、言葉の抑揚、さらには生活のリズム、場のしつらえ方などを共有する人びとが、村落の境界や住民か否かを越えてつながりあう、「非境界的集合」という新たな枠組みが導き出されている。たとえば、村落での暮らしの死活を左右する水稲の収穫が、各地を移動しながらハーベスターを駆る「流しのトラクター」によって担われており、その「流し」は馴染みというわけでもなく、その年その時の交渉のリズムによって決まるのだと言う。そうした「韻律」の共有による人びとの離接は、不意の訪問時の「動く食卓」や伝統芸能の継承、気まぐれな家庭菜園など、さまざまな場面に観られると言うのである。

本稿で川瀬 (2019) に注目するのは、まずそこで「共同体」像をめぐる研究と実践の相互作用が見られ、アクション・リサーチの問いの核心を共有するからである。さらに、その相互作用が、農業／往来／芸能などといった、それぞれに専門分化しうる領域を横断するかたちで見いだされている点も注目される。本稿でもまさにそのように、フィールドにおける人びとの集合的な営みがどのようにして成り立っているのか、当事者と観察者との相互作用——教えられたり裏切られたりする一連の過程を、芸能や部活、地域移動といった観点を横断するかたちで再検討してゆきたい。

この集合的な営みは、本稿のフィールドの人びとは「コミュニティ」とは名指さないが、現代日本では現場の人びとが意外にもそう名指すことがしばしば見られる (宮内2017、平井2020)。そのような「コミュニティ・インフレーション」(吉原2018) をひとまずは価値中立的に捉えたい。そのうえで、本稿のフィールドにおける人びとの集合的な営みについて、川瀬 (2019) が展望した「非境界的集合」を念頭に置きつつ、現代日本の地方社会におけるより具体的、歴史的な姿を描き出したい。

2. 佐井村という現場

(1) 人口が爆発し収束した村

フィールドとなる佐井村は、青森県・北東部の下北半島西岸に位置する。津軽海峡に面した南北40kmにわたる切り立った海岸線に、7つの浦が点在し、1920人が暮らす (2020年11月末住民基本台帳)。かつては北前船の寄港地として、あるいはヒバの積出港として栄えた。だが、20世紀以降は小型網などによる沿岸漁業を営むほか、1つだけタラの定置網を下げる浦のみ、20-30代の漁師が見られる (葉山2017)。ほかに南北の山間に2つ集落があり、1つは宮本常一も訪ねたかつての営林開拓の (宮本1971)、もう1つは戦後開拓の村である。

私が主に訪ねているのはこの9つの集落のうち、北から2番目の浦、「本村 (ほんそん)」と呼ばれる佐井地区である。1980年代に北部の海岸段丘上が大規模に圃場整備されたが、天然記念物でもある下北のサルなどによる獣害が深刻で (丸山2006)、現在はおおかた打ち棄てられている。1990年代からは港湾整備も進められ、観光船発着機能が充実されたものの、近年の団体旅行の衰退で期待されたほど観光業は盛んではない。



図1 佐井村の総人口（左軸）と産業別就業者数（右軸）の推移
（1969年までは村資料、1970年以降は各回国勢調査による）

一連の推移がよくわかるのが図1である。1880年以降、現在に至る総人口と産業別従事者数を示している。総人口は1880年の2000人弱から、1959年の6000人超を経て、2020年、140年前の水準に戻る、「爆発と収束」を経験している。現在の地方創生で引用されることの多い社人研（国立社会保障・人口問題研究所）の推計値によれば、今後も減少傾向には変わりないとされ、現実には、2015年の実績値は2013年時点の推計値をさらに下回っていた。

人口ピーク時の産業別の従事者数は、農業が約900人と最も多く、次いで漁業約700人、林業約300人と続く。村の人口減少はまずもって農業従事者の激減と軌を一にしており、林業従事者ともども現在は数えるほどしかない。漁業も1990年まで600人前後の水準を保っていたものの、現在は約200人に落ち込んでいる。これらに代わり、1970年代からは建設業従事者が約300人前後と村を支えてきたことがわかるが、2010年には減少に転じている。これに対し近年、増加しているのが福祉を中心とするサービス業であり、2010年には建設業を抜いて村の最大の産業になっている。しばしば「行政が村の最大の産業」といった俚言を、この村でも耳にすることはあるが、従事者数では底堅いものの約100人を数えるにとどまる。

(2) 祭礼から漂流するアクション・リサーチ

このように、およそ1世紀半かけて、人口が3倍に爆発し、そして収束しつつある村に、私は2012年から年に数回、足を運んでいる。発端は、大学の前任者が委託されていた、本村地区の鎮守・箭根森八幡宮の祭礼の記録保存研究を仕上げるためであった。祭礼は毎年9月14、15、16日に催され、神輿と山車の行列に神楽（伊勢太神楽系）が加わり、集落全戸を昼夜回る。委託されたのはあくまで記録保存であり、この年は記録を補充し報告書を完成することだけが求められていた。しかし、6月に挨拶に訪ねた折、「担い手が減っているので学生に手伝ってもらえないか」との相談を受けた。そこで、どうしたら外部から組織的に人材を受け入れられるのかを実証実験することも研究課題に加えてもらうこととし、同僚に依頼して学部学生6名とともに、前日準備から後日片付けまで6日間参加することにした。

その結果を踏まえ2013年からは、学部科目・社会調査実習の現場として、足かけ4年にわたり2、3学年の学生計40名と訪ねることになった。この科目（2015年まで人文学部、2016年、人文社会科学

部)はチーム・ティーチングを特徴とし、社会学と人類学の教員3名と協議しながら運営を進めた。まず2013年は、祭礼への参加を通じ持続可能な祭りのあり方の深掘りを軸にすえつつ、人口減少下の持続可能性をめぐる問いは他の生活領域にも広がることを念頭に、新たな生業を生み出そうとする地域振興の取組み、また医療・介護の現場にも訪れた。2014年も同様の調査を続け、小規模だからこそ機動的なネットワーク形成が可能になっているといった人口減少をポジティブに捉え返す視点を、具体的な営みから掘り起した。

しかし、村の人びとからは十分な共感を得られなかった。これを踏まえ2015年、16年は、調査課題そのものを村の人びとと協議して設定することとした。結果として2015年は、本村地区での神楽継承の現場と南隣の地区での祭礼について調査を進めた。さらに2016年は、祭礼にのめり込む人びとが大人も子どもも、日常は「部活」に打ち込んでいることを踏まえ、小中学校での課外・クラブ活動に焦点を当てた。この間、2014年2月(大学)、16年2月(大学)、17年7月(村)と3回、調査報告会を開き、そのつど地元の人びとと語らった。

この間の調査課題が変遷する軌跡(祭礼の記録保存→外部からの担い手受入方法探索→人口減少下の持続可能性の方策→祭礼の継承や比較→祭礼と部活の対照)そのものが、ここで言うアクション・リサーチ固有のあり方を示している。すなわち、当事者と研究者がたえず相互作用を重ねながら、それまでになかった認識をともに作り出してきた。それが如何なるものであったのか、以下で詳述する。

なお、私自身は上記の教育・社会貢献と並行して、2015年から県・村の委託を受け、農業や水産業にかかわるワークショップを年に2、3回、主宰してきている。この足かけ6年にわたる一連のワークショップもまさにアクション・リサーチであり、関わる村の人びと、村・県の担当者、さらに研究者とその集団にとって、それぞれに意味のある新たな知見が生み出されてきている(平井2017、2019、2020)。しかし本稿では、まだ私自身の力量不足により、先の祭礼を軸とする一連の実践とこの農業・水産業のワークショップ群とを、統合的に語ることができない。村の人びとの営みが、少なくとも私の目には、両者で大きく分かれてるように映るままだからである。それは何より、そのようにしか村の人びとの営みを捉え切れない私自身の視線の限界——世界を機能分化したものと捉えがちな視線の限界による。

3. 「空気感」あるいは「韻律」

(1) 祭のあとさき

まず、研究の端緒となった箭根森八幡宮祭礼についてである。詳細は青森県教育委員会(1996)、弘前大学人文学部宗教学・民俗学研究室(2001)、ひろだいリサーチ(2012)などに譲ることとし、ごく最低限のありようを記す。箭根森八幡宮は本村地区中央の山稜先端に位置する。地区もおおむねその山稜を境に、北部が古佐井(こざい)、南部が大佐井(おおざい)に分たれ、両地区とも約250世帯、約600人が暮らす。高齢化率もともに40%前後である。

箭根森八幡宮では前記のとおり毎年、9月の半ば3日間の例大祭にあわせ、神楽付きの神輿・山車行列が催される。行列は神楽、神輿、古佐井山車、大佐井山車の順で練り歩く。神楽には2人立ち獅子3頭のほか、旗持2名、別当1名、御堂(おどう)と呼ばれる祠に大小太鼓が各1名、さらに笛と手平鉦、各数名がつく。神輿は、警固、旗持、道具持、榊、天狗、道具持、宮司、稚児の後に2基渡御される。山車はそれぞれ神様の異なる大山と俄山が1台ずつ、警固を先頭に、曳綱を握る綱持多数、さらに起動を担う別の綱をさばく前綱1名、そして車輪を操作する梃子棒数名が取り付いて運行される。

山車に古佐井、大佐井とあるように、両地区には古佐井共済会、大佐井青年会という、おおむね40歳を定年とする青年組織があり、主に山車の運行を担う。両会とも会員は約30名を数える。ただし古佐井共済会は神楽の運行も昭和初期から委ねられている。他方、神輿の行列は「お宮」と呼ばれる氏子総代会の約40名により担われる。

例大祭の直接の準備は13日の午後から始まる。「お宮」による神社の清掃・装飾、両青年組織による山車の搬出・組立てが行われ、夕刻、宮司と「お宮」、青年組織が協議して決めた運行計画が共有される。両青年組織にはそれぞれ拠点がある。大佐井は漁協の旧漁網倉庫を借り、古佐井は自前の会館に集う。古佐井ではこの夕刻、賄いを担う女性たち（会員の妻女）の紹介や「協力員」「大神楽」と呼ばれるOBを交えた神楽のさらい（打習（うちならい）と呼ばれる）が行われる。

14日、両青年組織はそれぞれ早暁（4時）、山車を飾る笹を取りに山に入る。8時から山車の装飾（「もよい」と呼ばれる）が、10時から神楽の運行（全戸家祓、「町振り」と呼ばれる）が始まる。この時の「町振り」は主に、前記「協力員」「大神楽」、また非会員の中学生男子に委ねられる。「町振り」は負担軽減のため2012年から短縮され、子どもたちでもできるようになっていた。

夕刻、山車の装飾は電飾に切り替えられ（夜もよい）神社下に集められる。18時から神事が始まる。「町振り」の山伏様の装束とは異なる、白の袴と白袴に身を包んだ会員が、神楽を奉納する。この装束は、1993年に伊勢神宮奉納の榮に浴した折に新調されたものだという。

15日も笹取りから始まり行列の準備が整えられる。7時半、神事と神楽奉納の後、行列が神社を下りて街を練り歩く。担い手不足のため行列の少なからずは隣町で進む原発建設事業者が担い、山車も2009年から大山のみ動かされている。

小半刻ごとに休息が取られ、「ヤド」と呼ばれる御飯屋となった民家や公共施設で飲み食いが始まる。行列につく人びとは三々五々、思い思いに「ヤド」から離れ、ケヤグと呼ばれる知己やマギと呼ぶ係累、あるいは義理のある人、血のつながる人の「イエ」を訪ねる。「イエ」の側でもそれを予期して、卓いっばいの料理と酒でもてなす。行列は18時に神社に戻り、再び神事と神楽奉納が営まれる。並行して「もよい替え」された山車が19時から22時まで、また、「町振り」も同じ頃まで続く。

16日も前日と同じように明け暮れる。ただし、22時半から神社下の一の鳥居前で「お宮下神楽」と呼ばれる神楽奉納が行われる。この時ばかりは近在からも人が集まり、神社前の路上は鈴なりの人ばかりとなる。終わると、神社前に集結していた両青年組織が一行に向き合って挨拶し、古佐井に戻ってゆく山車を、大佐井の人びとがいつまでも弓張提灯を振って送る。「両佐井別れ」である。そして深更、1時頃まで、それぞれの地区での山車行列が続く。

17日は10時から山車の解体、山車小屋への撤収が行われ、昼寝ののち、18時からそれぞれの組織ごと「あとふき」となる。古佐井はもとより大佐井でも、山車神楽の打習がいつまでも続く。

(2)「ゆるくない」という韻律

読者は以上の13日から17日まで続くまつりの姿を聞き、どのように感じるだろうか。人びとは私たち、外からやってきて関わろうとする者たちに対し、それを一言で「ゆるくない」と語る。文字どおり、簡単ではない、大変なことだという意味である。この言葉は、たとえば、休憩が終わり腰を上げるときに「あーゆるぐね」などと、ことごとくにたしかに人びとの口をついて出てきていた。同時に、飲み食いの輪に交じっているとき、「どうだ、先生、ゆるぐねーべ」と、外部者に対してまつりの印象を尋ねるときにも、しばしば使われていた。

特に2012年、記録保存に加え、外部者の参加のあり方を模索する研究課題を掲げたとき、であるなら、青年組織の人びとに求められたのが13日から16日（17日）までの全日参加であり、それはまさに「ゆるくなさ」を十分に理解してもらいたいという意向からであった。というのも、2010年から、村の政策立案に関わっていた別の大学の教員との関係で、数名の学生がやってきていた。しかし、1日2日、出たり入ったりする「客」であり、それでは担い手と呼べないのではないかと、青年組織では議論になっていたのである。

この「ゆるくない」という感覚の共有が、客観的な理解、たとえば早暁から深更までという時間の負荷、飲み食いを続けながら細心の注意を払いつづけるといった身体的・精神的負荷にかんする、時間数や疲労度などの計測を通じた理解を超えたものであることを、まさに身をもって実感させられる出来事があった。17日の「あとふき」の最中、もう3時を回っていた頃であったが、ある学生が青年組織の1人に殴られたのである。

私はすでに宿所に帰っていたが、すぐに呼び出された。聞くと、「そんなにゆるくなきゃ、止めればいいんじゃないですか」という学生の一言に、彼が激高したという。見渡すと、会員の多くは「暴力は良くない」と口々に唱えるものの、それ以上言葉を濁すさまからは、学生よりも手を挙げた彼にこそ同情が集まっていると直感された。同情を集めていたS・Y(1980年生)は、たしかに誰もが認める神楽振りであり、また元会長であり、村で圧倒的な規模をもつ建設会社の専務を務めるS・M(49年生)の次男であるということも無視できない。だが、それ以上に、震災復興現場の出稼ぎ先から無理をおして帰ってきたS・Yに対し、「ゆるくない」→「止める」という短絡的な論理で応じたことに対する失望が見て取れた。とりわけこのときは、まさにその「ゆるくなさ」を実感し理解するために、6日間の帯同が求められていたのである。

事後的に回顧すれば、この「ゆるくなさ」こそ、川瀬(2019)が提起する「韻律」に当たる。「ゆるくない」という言葉は文字にすることもできるし、発語もされる。ただ、それはたんに何らかの状況を表現したり、その理解を求めたりするのとは異なる機能を果たしている。学生が殴られたのは決して、「ゆるくなさ」で表現される事態を理解していないからではなかった。むしろ、十分に理解していたからこそ、「止める」という論理的な思考が示されたのだろう。

だが、人びとが「ゆるくない」状況を生み出し、またそのように語るのは、そうした論理的思考を引き出すためではない。そこではごく単純に、「ゆるくない」状況を分かちあい、またそれを「ゆるくない」と語りあう関係性が紡がれている。だからこそ、「何もわかっていない」と殴られたり、「付き合い切れない」と冷たく取り巻かれたりしていたのである。このように「ゆるくなさ」は、字義どおりの言葉を超え、それを共有する関係性を紡いだり、紡がなかったりする契機となっている。その意味でまさに川瀬(2019)の「韻律」に当たるのである。そこでの「韻律」もまた、言葉の抑揚といった言語学的な定義を超え、関係性の端緒と位置づけられている。しかも、文字化され発語もされる言葉としてだけでなく、現実の人びとのふるまいや人びとが織りなす状況と不可分と見なされている。

(3)「空気感」という概念化

実のところ、2012年の当時、また13年、14年と続く実習のさなかには、私も私の周囲も「韻律」という概念を知らなかった。だが、学生の何人かは似たような言葉を口にしていました。「空気感」という表現である。

そう言われて私自身、実感されることがあった。それは2つの青年組織の「空気感」の違いである。図2のように、大佐井では「先輩」と呼ばれるOBたちも会員も、また学生たちも、バラバラと置かれたテーブルに三々五々座り、飲み食いしている。古佐井は異なる。床の間を正面に会長を筆頭に、役職・年期に従い列座する。OBは末席、学生たちも同様である。

さらに、女性たちに注目すると、大佐井では女性も思い思いの席に交じっている。古佐井は末席どころか、広間の外、厨房の一角にはみ出している。そこには子どもたちの姿もある。不思議なものであるが、大佐井は比較的、年齢の近い独身の男性が多い。賄いの女性たちもしたがって数が少ないし、子どもも少ない。対して古佐井は、妻帯者が多くを占め、子どもたちも数多く呼び込まれる。

こうした、仮に「大佐井=雑居」「古佐井=列座」とことさら対比させてみると、川瀬(2019)におけ



図2 2つの青年組織の集い方

る「韻律」をかたどるものの1つに、「動く食卓」と呼ばれるものがあつたことに気づかされる。そこで描かれた農村では、円い食卓がいつでも動かせるようにしつらえられていて、不意の来客があつても、すぐさま適宜動かして、思ひ通りに飲み食いが始められるようになっていた。そこでまごつくようでは関係性が紡がれにくい。

大佐井はそうした円居の場ではなかったが、私たちのように外から関わろうとする者でも、気がねなく座を占めることができた。古佐井ではそうは行かない。私たちはただ末席におればよいというだけでない。特に私には時折「先生！」と声がかかる。すると、会長やOBの下に参じて、しばし談じなければならぬ。だが、つねにその時、私は刺すような会員や女性たち、OBたちの視線を感じていた。それは「いつまでもそこに居つづけができると思うなよ」という目であり、鈍い私は実際にそのように席を立つように促されることもあつた。あるいは四方から飛ぶ「先生！」という声は、暗々裏の配慮であつたのかも知れない。

座のありようだけではない。何を談じるかも大佐井と古佐井では異なつていた。大佐井では何を尋ねても答えが返つてきた。私が主に聞くのは、人びとの生い立ちや生業のことである。熱心に語つて聞かせ、ある最若手の漁師は後に手紙を送つてよこしたことがある。これに対し古佐井では、自ずと夫婦の営みなどセクシュアリティにまつわることが多くなる。まことに親身に、私に子どもがないことを案じ、さまざまに知恵を授けてくれたことをよく憶えている。

私にはどうしてもこの古佐井の列座になじめず、大佐井の雑居や古佐井のOBたち、とりわけ「大神楽」と呼ばれる60年配の人びとの下に長居をしていた。学生たちも同様で、ある者は古佐井の列座に、ある者は大佐井の雑居に、それぞれ自分が共有しうる「韻律」に合った場で、時間を過ごしていた。そうしたありようを当時の学生たちは、自らも含めた「空気感」の違いと表現していた。

この「空気感」という概念化は、事後的にふりかえれば、重要な意義をもつものであつた。それまでは「ゆるくなさ」という言葉をもとに、それを客観的に理解するだけでなく、主観的に共有されることが求められていた。これに対し、「ゆるくなさ」を「空気感」と表現すれば、「ゆるくなさ」は数ある「空気感」の1つに相対化される。しかも現実に、たしかに大佐井の人びとも「ゆるくない」と口々に語るのだが、誰が見ても、当事者自身もわかるかたちで、大佐井と古佐井では「空気感」が異なつていた。したがって、外部から関わる私たちも、自分たちなりに主観的に共有しうる選択肢が開かれた。その意味では、ただ1つの「韻律」を語る川瀬(2019)以上に、「空気感／韻律」という概念の可能性を開くものとも言えるだろう。1つしか「韻律」が語りえないものなら、その実在を検証することが難しくなるからである。

他方で、私たちの現場の場合、当事者たちもまた「空気感」という言葉ならば、まさに彼ら(彼女ら)が求めている、客観的な理解を超えた主観的な共有をも含む語感を含んでいた。そうした、ゆるやかな納得のもとに、2013年からほんやりと、この「空気感」のありように焦点を当てる調査が進められた。ある女子学生は2014年にかけて卒業研究にも取り組んだ。彼女は自らに合う「空気感」として古佐井の列座に交わり、何度となく足を運んだ。実習全体としても2014年、南隣の地区の、きわめて似たまつりで時を過ごす機会を得た。そして、そこと、とりわけ古佐井との「空気感」の違いを、学生たちなりに書き起こした。

このように、たしかに「空気感」あるいは「韻律」という概念は、外部の者に現場との関わりを容易にする力がある。だが、同時に、「空気感」と相対化して言語化まで試みると、現場に波紋をもたらすことにもなる。最初の女子学生の卒業研究は、とりわけ妻女たちから反発を生み、対象を変えざるをえなくなった。隣の地区の「空気感」の言語化は、隣り合うとは言え容易に体感しえないものを知る面白さ以上に、ことに「ゆるくない」とされた古佐井の人びとにとっては、自分たちのありようを否定された感覚があつたと聞かされた。

(4)「ゆるくなさ」と「おもしろみ」または「語りすぎる語り部」

私自身は当時、学生とともに訪ねるかたわら、まつりの最中は主に古佐井のOBたち、特に「大神楽」と呼ばれる人びとと、ともに過ごしていた。それは事後的にふりかえれば、「ゆるくなさ」を人

びとが時として嬉々として語る、矛盾しても見えるふるまいの源に関心があったからである。私は大佐井の雑然とした「空気感」にも癒されていたが、同時に、自分自身どこかで「ゆるくなさ」に憧れ、自らの言葉として「ゆるぐね」と語りたかったのかも知れない。

「大神楽」と呼ばれるのは、OBたちのうちでも会長を経験した人びと、また神楽に堪能な人びとに限られる。この呼称は1982年頃、生まれたという。もともと青年組織を退会した者は「お宮」に上がる、すなわち氏子総代になるのが例であった。しかし、青年組織で上役を務めた者が、氏子総代として、また一から年期を積みねばならないのはたしかにつまらない。また、現役たちからしても、人手はいくらあっても足りないので、OBたちの手助けがほしい。そこで、「協力員」の名の下でOBたちの協力を求めていた。「協力員」で年期を積むと、俄山警固→大山警固→警固長と役も上がっていく。だが警固長の上はない。それを「大神楽」としたのが始まりだという。

「大神楽」たちは「アンサンブル」と呼ばれる紺の袴を身にまとい、白足袋に雪駄姿で、主に神楽につく。囃子を率いる大太鼓、また別当を主に務め、知らぬ者からみれば、神楽の棟梁にみえる。さらに行列の最中の「ヤド」では、会館とは異なって上座が特に宛がわれ、大神楽どうして飲み食いを続ける。私は、必ずしも古佐井の列座の秩序に位置づけようもない、外部からの訪問者「客分」の地位を利して、この「大神楽」に始終交じっていた。

実際に、学生たちが現役会員たちからは十分に聞き取れなかった、ここに記しているような、いきさつにまつわる話は、すべて「大神楽」から教えられたことである。とりわけ、最年長のO・Y(1939年生)から、「この人、詳しいから、ついてまわるといいよ」と紹介されたK・S(1954年生)と時を過ごすことが多かった。K・Sは、まつりの1つ1つ、たとえば、山車の装飾1つ1つには、すべて「人の道」に通じるものがあると、ことごとに語っていた。同時に、よく聞かされたのが、目に見えないものについてである。人が死ぬとある路地に線香の香が立つとか、獅子頭の魂を抜いておかないと災いが起こるとか、ある場所、ある家を訪ねるごとに、挿話を語って聞かせてくれるのであった。

そうしたK・Sも口癖にしていたのが「ゆるぐねえべ」であった。そこで私はある時尋ねてみた。「何が一番ゆるぐなんでいんですかね」と。するとK・Sはすぐさま「神楽だべ」と返してきた。神楽は例大祭の折だけでなく正月にも全戸の家祓がなされる。さらに、春秋の大祭、弁天祭(海の記念日)に奉納されるほか、新築に際しては「家固め」と呼ばれる特別の曲目が演じられる。しかも、例大祭の前後2週間、毎日「打習」がなされる。自分たちがさらうだけでない。大祭後は小中学生に教授し、学校や郡域での発表会に備えさせる。このように神楽のほぼ通年にわたる営みこそ「ゆるぐね」と語るのである。もちろん、こうした神楽の運行は、本来は山車の運行組織である青年組織全体にも重くのしかかる。単純に言えば、神楽を担う古佐井は、大佐井と同じくらい的人数で、何倍もの、しかも濃密な時間を互いに過ごす必要がある。これが古佐井独特の「ゆるくなさ」の根源にある。

この説明は私にはよく納得された。特に「ゆるくなさ」を「韻律」だとすると、川瀬(2019)では十分にふれられていなかったが、その時々交渉による以上に、こうして一年を通して、さらに年々歳々、積み重ねられ、「韻律」は感受されやすく、合う／合わないも精密化されてゆくと考えられる。

同時に、私にはよくわからないこともあった。先に記したように、なぜ「ゆるくなさ」を、K・Sはじめ人びとは、恰も嬉々として語るのか、ということである。K・S自身、学生を殴った青年の父S・Mが専務を務める建設会社に身を置きつつ、神楽が動かない時には「旅をする」すなわち建設現場を経めぐり出稼ぎに赴いていた。建設会社の仕事は、港湾整備、さらには断崖の続く海岸線を貫く道路整備が一段落してから、めっきり細り、多くの男たちは他に稼ぎの当てを探さねばならなくなっていた(図1)。それもまた「ゆるくなさ」をいや増す生活の「韻律」に他ならない。そうした身の上すらも、雄弁に語るのとはなぜか。

たとえば、先の「打習」である。これも「大神楽」と同様、1982年頃、新たに生み出された営みだった。もともと見よう見まねで憶えられていた神楽について、「先々の人手不足を見越して」、組織的に子どもたちに教授する場を作らねばという意図で生まれたという。それはその通りだろうし、現に子どもたちは、ことに「ゆるくなさ」を生む全戸家祓の「町振り」の、有力な担い手になってい

た。ただ、同時に「打習」は、大人たち——現役・OBを問わず——自身も神楽をさらう場にもなっているだけでない。この1か月、連日連夜、会館に集わねばならないのは、「ゆるくなさ」をさらに強めるものともなっていた。

さらに気にかかったのは、さまざまな経緯を語るK・Sに対し、同席していたO・Yが時折、「ションジ、力むな。余計なことしゃべるな」と制する場面にくたびか接したことである。たとえば、K・Sが1990年代前半、神宮奉納を取り仕切り、会館建設を主導したことを誇らしげに語ったとき。あるいはまた夕刻の神事に際し、もう暮れかかっていたのに、高張がまだ灯っていないからと、山車の電飾の点灯を止めさせたK・Sが、いくら「大神楽」たちからなじられても「基本」だして」と譲らなかったときである。

私はこのやり取りの傍らにいながら、K・Sが語る「ゆるくなさ」や「基本」というのとは、別の「韻律」を、この人びとは共有しているのではないかと、ぼんやりと感受していた。事後的にふりかえれば、それは、伝統あるいは在来の芸能をめぐるコミュニケーションについて、生田・北村(2011)が概念化した「形」と「わざ」の対に、類比させて捉え返すこともできる。在来の芸能では、K・Sの語る「基本」のように「形」が重んじられる。とりわけ芸能なるものありようを言語化し、芸能の外に位置する人びとも伝えようとするとき、「形」として定式化される。現にK・Sは、O・Yが「この人の話聞くといいよ」と私に奨めたように、ここでの営みを外部に語るときにとりわけ招き入れられる存在でもある。実際、青森県教育委員会(1996)はじめ、これまでの芸能調査では必ず、K・Sが調査協力者として記されている。

だが同時に、芸能なるものはそうして「形」として言語化しえない営みでもある。その核心を伝えるのに用いられるのが「わざ」にまつわる表現である。たんなる擬態語だけでなく、「ゆるくない」のように聞く者に、ある種の謎のように感受される表現が用いられることもある。そのうえで、「大神楽」たちのやり取りなどに耳を澄ませていて気づかされたのは、「ゆるくなさ」とは異なるもう1つの常套句であった。「おもしろい」あるいは「おもしろみ」である。たとえば先の「基本」だして」というK・Sの言葉に対し、別の「大神楽」は「おもしろぐね」と返していた。

「おもしろい／おもしろみ」という言葉は、そのように、ふとした時に漏れ聞くものであった。たとえば、「大神楽」について朝から全戸家祓を続けていたときである。いつ果てるともない「町振り」の繰り返しで、22時を回ってもまだ終わらなかった。私がここぞとばかりに「ゆるくないですね」と声をかけた。すると、ある「大神楽」は「おもしろみがあるして」と、周りを見回しながら返したのであった。聞くとその「おもしろみ」とは、回れば回るほど、お花=寄付が上がることだと言う。さらに言えば、あまりの疲労のせい、次の家への途次に、山車の囃子を奏で出し、踊り出す人びとも出るような「集合的な高揚感」(田中2007)を指していたのかも知れない。

興味ぶかいのは「おもしろみ」と「ゆるくなさ」の対である。両者は意味内容として対極的である。前者はまつりのポジティブな面を語るのに対し後者はネガティブな面を指す。さらに、語られ方も対照的である。外部には「ゆるくなさ」が強調されるのに対し、「おもしろみ」は内部で、それもふとした時に漏らされる。

だがしかし両者は切り離されない。むしろ「おもしろみ」が豊かであるからこそ、それを戒めるかのように「ゆるくなさ」が繰り返し説かれる。想起されるのは、当時の共済会の会長O・Mが、行列の先頭で高張を持ちながら、何度も私に漏らした話である。今の山車運行は「ゆるくない」。というのも、かつては休憩でなくとも「イエ」に上がり込み、そのまま飲み倒れていても、誰かが山車を動かしていた。それが「おもしろみ」でもあった。今はたしかに山車は動かしている。だが、誰かが欠けたら動かさない。そういう文字どおりの「あそび」こそ「おもしろみ」であった。とは言え、「おもしろみ」だけでは山車は動かない。やはり「ゆるくな」ければ。それが悩みだ。

「おもしろみ」は、伝統芸能の継承のありようを観察した菅原(2010)が、彼らを「「楽しさ」の共同体」と表現したように、ある程度、どこにでも見いだされる内部言語だと考えられる。さらに言えば、そうした不確定の「あそび」こそ「わざ」と語られ、芸能にかかわる人びとを「共同体」と比しえるような、凝集性を生み出す源泉だとも言える。だが同時に、私に注意されたのは、そうした「お

もしろみ」はつねに戒めとしての「ゆるくなさ」と不可分に見えたことである。

「ゆるくなさ」だけを捉えれば「打習」といった新たな創造物は止めた方がいい。同じように創造された営みは、これまで触れてきたものでも、神宮奉納の際に新調した装束への着替え、お宮下神楽、両佐井別れなど、複数見られる。だが、人びとが実際に採ったのはそれらを止めることではなかった。「町振り」の所作の短縮であり、俄山山車の運行停止であった。「ゆるくなさ」だけを焦点化すれば、こうした決断は矛盾に見える。場当たりのにも映る。しかし「ゆるくなさ」と「おもしろみ」が不可分だと考えるとそうではない。「町振り」は所作を縮めても範囲は維持される。ほぼ唯一の見せ場であるお宮下神楽は当然、残される。

K・Sが「余計なことをしゃべるな」とされたのも、「語り部」として「ゆるくなさ」ばかりを語ろうとするからである。しかもK・Sはその語りを、外部に対してだけでなく、内側の人びとにも向け、強いようとする。言わばK・Sは「語りすぎる語り部」である。だから、外部からのひと時の訪問者をあしらうのには重宝されるが、内部では敬して遠ざけられるのである。

4. 「フック」を介した社会移動への視野の展開

(1) 「流派」の廃止

K・Sがそのように見える端的な出来事に、しばらくして突き当たった。2014年、3年目の調査では、隣地区のまつりから「空気感」の違いをたどる他に、まつりの後の「打習」と、次いで開かれる中学文化祭での上演を訪ねた。この「打習」への焦点化は、まさに「縮小ばかり記録されるのはおもしろぐね」という当時の古佐井共済会会長O・Mの言葉を受けたものであった。ここで明確に、人口減少をポジティブに捉え返すという私たちの視点は、いったん棚上げされた。それに替え、文字どおり「ゆるくないがおもしろい」と彼らが語る「打習」とは如何なる場かに注目することにしたのである。その際、先の菅原（2010）に学び、すべてのやり取りを映像に記録し、学生たちはフィールドノートとともに記録映像から知見を引き出していった。金曜と土曜の夜の打習を3週、その後の日曜の文化祭とまる1月、毎週通ったのである。

学生たちの分析によれば、まず「(佐井の獅子は) おなごだから手を返す」「(獅子の) 後ろ(振り)は前(振り)さ腰をつける。生き物だべ」といった生田・北村（2011）の「わざ言語」の数々がとりだされた。さらに、大人があえて悩む姿を見せることにより、大人と子どもが「教える／教えられる」という対立的な存在を超え、ともに獅子を振る「間柄になる」と分析していた。この視点は、やはり生田・北村（2011）が強調した、芸能における師弟関係のありよう、すなわち「行為to do」を超えた「存在to be」という視点から、さらに一歩進んでいる。大人と子ども、師匠と弟子とはそれぞれの「存在to be」に至るわけではない。両者は不可分でありむしろ間柄に「なる」あるいは「帰属するto belong」と。

そのうえで学生たちが注目したのは、「打習」における「流派」の存在であった。ある大人が、ある小学4年生に「それは違う」と注意した際、その子は「こう教わった」と言い返していた。「誰からだ」と尋ねた答えを聞いたその大人は、「へば、いい」と自らの主張を取り下げたという。それは大人のなかにも序列関係があるという以上に、大人たちが伝える獅子の振り方に主に2つの系統があり、両者は互いに不可侵なのであった。

しかも学生たちによれば、どの「流派」につくかは、子どもたちの意思に任されているという。子どもにより、師となる大人との日常的な距離感から選ぶ者もあれば、純粹に「かっこいい」という憧れに従う者もあった。学生たちはこの「流派」の存在と、だからこそ確保される子どもたちの選択権の存在とを、日常生活とは異質な場に子どもたちが誘われ、自ずと「間柄になる」重要な契機と分析していた。自ら選ぶことへの着目もまた、事後的にふりかえれば、生田・北村（2011）が指摘していた、現代の伝統芸能があくまで「主観的活動」すなわち自ら選び取られたものであるという視点と通底する。また、倉島（2007）が、「流派」というものがあるからこそ、身体実践をとまなう共同体は決して「閉じない」という指摘とも響き合う。

ところが、こうした知見を報告した場（2016年2月）で、驚くべき事実を伝えられた。それは「流派」を廃止し統一するという彼らの決断であった。しかもそこで排除されたのは、私たちに「基本」を語ってやまなかったK・Sの「流派」だったのである。

もともと「流派」という存在自体、「打習」という場ができたことで生み出されていた。それまでの見よう見まねから、特定の師匠がつくことになった当然の帰結と言える。さらに、「打習」創設から約10年、神宮奉納を機に、それら顕在化してきた「流派」の統一が議論された。その際、囃子はさほど紛糾せずまとまったが、獅子振りについては2つの「流派」が分立した。1つが、当時、会長を務めていたK・Sの系統であり、もう1つが、後に会長を務め、現在も警固役として日常的に後進の指導に当たるH・T（1957年生）が率いるものであった。それが今回、H・Tの系統に一本化されることになったのである。

H・Tは現村長の三弟である。当時、次三男はまつりにもほとんど「かだる」（関わる）ことが許されず、H・Tが獅子振りを始めたのも打習が創設されてからであった。高卒後、東京圏の工場に就職したものの体を壊し帰郷していたH・Tは、ふらりと打習の場をのぞいて、「筋がいい」と誉められたのを機に没頭する。自分でティッシュ・ケースの空き箱を組み合わせ、獅子頭を振る要諦を探究していった。私は彼の振る獅子を実見しえていないが、人びとは「生きモノのようだった」と口をそろえる。

H・Tに來し方を尋ねていた時である。「打習がなければ、また村を出てたかも知れないですね」。そう語るのはいずれでもない。たしかに彼は帰郷後、S・Mの口利きで建設会社に拾われた。しかし、ほどなくして社会福祉協議会に転じ現在に至る。他方、「打習がなければ、村に帰って来ない」と語る者もいる。今回、「流派」の統一を決断した会長N・M（1974年生）である。彼は「打習」で育った子どもたちとしては第1世代に当たる。建設会社の従業員の子に生まれ、彼もまた土木型粋工として村外各地の現場で日々を送る。会合や行事のつど、仕事を休んで帰郷し、まさに「ゆるくなさ」を体現する人物である。そして何より、獅子振りとしてはK・Sの系統を継ぐ最有力の人物なのであった。

N・Mは口数が少ない、と村の人びとも語る。ただでさえ土地の言葉がまだまだよくわからない私には、N・Mの考えをうまく言語化することができない。だが、会長であるだけでなく、K・Sの有力な弟子であり、誰よりも「ゆるくない」関わり方をするN・Mにしか、「流派」廃止の決断はなしえなかったことは理解できた。「弟子を育てるおもしろみは、ある」と彼は言う。ただ同時に、「打習がある、おもしろみも、ある」と言う。彼は打習で、たんに弟子を育てているだけではない。打習という場に集う人びと、大人も子どもも眺め渡し、それぞれが「教え教えられる間柄」になっていく時と場を、ともに過ごしていつている。それが彼にとっての「おもしろみ」であり、それは「弟子を育てるおもしろみ」を超える何かをもつ。だからこそ彼は「流派」を廃し「弟子を育てるおもしろみ」さえ手放す「ゆるくない」決断をなしたのであろう。こうした「教え教えられる間柄」を生む場があるから村に帰る、さらに、そうした場の存在自体を何よりも大切するというN・Mのありようは、「打習」という場がたしかに、学生たちが見通したように、「教え教えられる間柄になる」場、すなわち予め「そうである to be」以上に「そうなる to belong」場であることを証立てていよう。

(2)「部活」という場

この「打習」のような帰属の場が、この村には他にもう1つ見出せた。人びとが「部活」と呼ぶ、小中学校での課外活動である。N・Mも吹奏楽に打ち込み県大会や東北大会で入賞経験をもつが、他にも彼の2期前の会長O・Mがのめり込む野球、1期前の会長T・R（1971年生）が特待高校・大学進学をはたした卓球、そして、多くの子どもたちが取り組む陸上と、4つの「部活」が小中横断的に取り組まれていた。しかも「部活」は、O・Mがそうであるように、帰郷後、コーチとして取り組んだり、草野球をしあったりする営みのかたちで、大人になってからも生き続けている。

そこで2016年、学部改組にともないこれ以上の経費負担が難しいと考えられた実習最後の年、O・MやT・Rなどと相談し、「部活」の調査を進めた。学生たちは小中学校に通い、時には部活の映像を記録し、時には学習支援をし、また時には子どもたちと将来を語りあった。また、保存されている

30年分の卒業文集をデータ化し、「部活」のありようを時間の奥行きをもって掘り下げていった。すると、全国的には近年、設立が呼びかけられている「地域スポーツクラブ」(中澤2014)が、この村では2000年代に入って自生的に次々と生まれていることがわかってきた。帰郷後、野球のコーチを務めるO・Mもその一例であるが、陸上や卓球ではさらに組織立って行われていた。

もともと「部活」の萌芽は1980年代前半、熱心な体育教師K・Fが中学に赴任してからであった。その教えを受けたI・N(1968年生)が、やはり中学の体育教師として帰郷し(2000年)、小学生にも教えはじめた。さらにI・Nは2009年には退職して有償のスポーツ・クラブを立ち上げ(本業は住職)、現在まで次々とジュニア・オリンピック優勝者を輩出している。彼の2人の娘たちも特待進学をはした後、「村に恩返しをしたい」と帰郷し、村職員のかたわら指導に当たっている。

卓球では2007年、帰郷して社協職員に採用されていたT・H(1974年生)がやはり有償の卓球クラブを立ち上げ、こちらもジュニア・オリンピック優勝者(T・Hの娘)を育て上げたほか、O・Mが指導する子どもたちを核にしたメンバーは、2010年、郡域の県立高校を県大会準優勝に押し上げた。

学生たちは、こうした地域ベースのスポーツ・クラブと課外活動とが、まさに「ゆるくなさ」と「おもしろみ」を子どもたちに感受させる、小学校・中学校それぞれに異なる「対」になっていることを見出していった。さらに、学生たちが注目したのが、O・M、I・N、T・Hといった人びとがみな一様に、「部活」という場で育ち、また「部活」という場に戻ってきて、さらにそれを充実させつつある点であった。その際、学生たちはO・Mが東京からの帰郷を決めた時の回想に注目した。「ここじゃない、っていう感じがな」。東京での暮らしには生計のうえでも人間関係のうえでも、仕事も遊びも大きな不満はなかった。しかし、いつも頭をよぎっていたのが「ここじゃない、っていう感じ」であったという。では、何なのか、それは本人にも言葉にできない。ただ、彼は「部活」という場で育ち「部活」という場に戻っている。あえて言えば、それだけが東京になく、この村でしかなかったものであった。

もちろん正面切って「卓球のコーチになろうと村に戻ってきた」とは語られない。家族の事情がまず先に立つし、仕事が見つからねば帰るに帰れない。そこで学生たちは、先のI・Nの娘が語ったような「村への恩返し」を、子どもたちに動機づけるメカニズムなどを探索していった。だが、結局、うまく言語化できない「ここじゃない感じ」を生む何かを「フック」と概念化して、人びと自身に問いかけた。報告会で、そう問われた村の人びとも、こうした概念化が正しいとか正しくないとかは言えない。ただ、村に帰る帰らないには、家族の事情の如何、仕事のあるなしに関わらない、何とも言えない「引っかけ」が、それぞれの人にあるか否かだという見直しには共感が得られた。

私自身ははじめ、学生たちがその「引っかけ」を「フック」と呼ぶことには躊躇いがあった。安易にマーケティングなどで使い倒される言葉を用いることの是非だけでない。Bauman(2001)がコミュニティの核心にある、人びとを抑圧し排除する働きを“peg”と呼んでいたからである。この“peg”の用法も、ビジネスで通用されるのとは微妙に異なる。ただ、“hook”を通例とは異なる意味で使ったとしても、「部活」のありよう、この村の人びとの生きざまを共感的に、肯定的に語ろうとするのに、相応しいとは思われなかった。しかし、事後的に考えれば、“hook”は“peg”とは異なる。人びとを拘束しはするが、たしかに「あそび」を持つ。何かという時には思い出され、うまく言葉にできない馬鹿馬鹿しさにも似たものである点では、「ゆるくなさ／おもしろみ」の対を表現するのに適している。

(3)「部活」、そして「打習」の運命

2020年7月、私は農林水産業をめぐるワークショップに訪れ、久しぶりに大佐井青年会の人たちと飲んだ。何とはなしに聞くと、卓球クラブを主宰していたT・Hは、ジュニア・オリンピックに優勝した娘が東京圏の高校に特待進学するのと同時に、彼自身、娘を含むメンバーのコーチとしてスカウトされ、一家を挙げて東京に移住したという。クラブは、やはり「部活」という場で育ち、そして戻ってきていた中学教師O・T(1980年生)が退職し、なんとか引き継いでいる。

「部活」という場は、T・Hやその娘をはじめ、多くの子どものために、何かをなせるという自信とともに大都市に出られる得がたい機会を与えていた。そうした機会の存立自体、ジュニア・オリ

ピックが1992年に創設されていたように、中澤（2014）が言う20世紀末から進んだ「グローバルなスポーツ・トーナメント・システム」の形成と不可分であった。だが、そのグローバルなトーナメント・システムの成熟は、T・Hが育ててきた場が根こそぎ吸収されたように、プレイヤーだけでなく彼ら彼女らが帰属する場をも、トーナメントの対象に繰り込もうとしている。プレイヤーにとって帰属する場が重要であったとしても、あるいは、重要であればあるほど、その場が根ざす地域なるものは二次的な意味しか持たない。

他方、大佐井青年会の役員ながら、会の枠を超えて「打習」という場を愛してやまなかったK・Y（1972年生）は、父から引き継いだ村で唯一の食堂を経営していたが、子どもの学費を捻出するのに悲観し、県内の中都市にやはり一家を挙げて移り住んでいた。スポーツ・トーナメント・システムにうまく乗れない子どもたち、あるいはそれ以上に親たちは、このように「教育」のトーナメント・システムに希望を託さざるをえない。スポーツとは異なり十分にグローバル化されておらず、そのトーナメント・システムの実効性が、今後ますます確保されるかは不透明である。だが、それに代わりうるものはたしかに見えず、また、この村では、スポーツ・トーナメント・システムに乗った移動が、わかりやすい現実として散在しているだけに、K・Yのように思い詰める人びとは少なくない。現に同様の理由で村を後にした青年組織のメンバーが、この1、2年で2人はいるという。

試みに、コホート別の人口の推移を取り出してみた（図3）。上から2つのコホート（1946-55年）

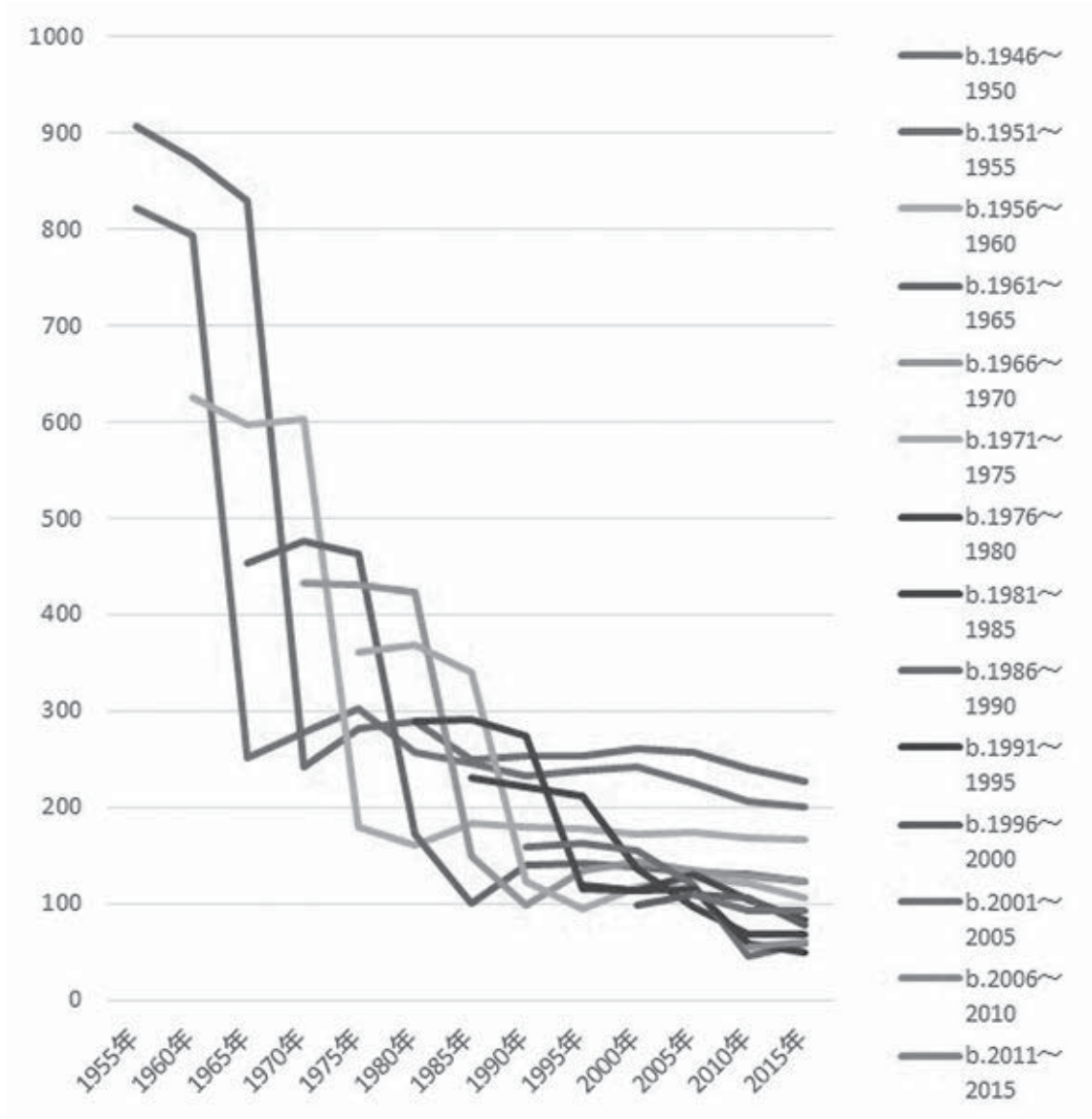


図3 佐井村のコホート別の人口推移（各年国勢調査による）

は、K・Sをはじめ、私が帯同していた時分のおおむねの「大神楽」の人びとに当たる。この世代はともに、人びとが「クラス」と呼ぶ同学年で数えると、10代後半で約50人まで減るものの、20代前半・後半にかけ約60人にまで戻り、30代前半に再び流出し約50人となっていったん安定する。これに対し、次のH・Tの世代（1950年代後半生まれ）は、10代後半、20代前半にかけ「クラス」が40人以下まで減り、20代後半に若干戻してから安定する。これはH・Tの言う「打習がなければ、また村を出ていた」という言葉を裏書きする動きに見える。同様に1960年代生まれまで、30代前半以降の流出は見られない。「打習」あるいは「部活」という場には、たしかに「フック」の効果が見られるのである。見方を変えると、K・Sのような1950年代生まれの人びとが、「打習」という場を生み出したのも、自分たちの世代が足もとで再び流出していたことと関わっていたのかも知れない。

次の1970年代前半生まれがN・Mのように、文字どおり「打習」また「部活」の第1世代である。1960年代生まれと同様、20代前半にかけ「クラス」は約20名に減るものの、30代にかけ約25名に戻す。これを見れば「打習」や「部活」という場の「フック」は、流出した人びとのうち1割弱にはたしかに効いていた。だが、1970年代前半生まれは40代前半で再び流出を始め、食堂経営から身を引いたK・Yの挿話を想い起させる。70年代後半生まれはさらに早く30代に入ると一貫して減少を続けている。「打習」や「部活」という場の「フック」は、着実に弱くなっている。「打習」はN・Mの願いとは逆に、「流派」が失われると、その場に自ら帰属してゆく重要な契機が損なわれ、ますます人びとを遠ざけかねない。「部活」もまた、グローバルにも開かれうるトーナメント・システムを背景に求心力を得ていたが、そのシステムはプレイヤーだけでなく場ごと根こそぎに吸収しかねず、さらに、「部活」という場になじめない子どもや親たちを、「教育」トーナメント・システムに押しやる、予期せぬ効果も生みつつある。

もとより、「打習」や「部活」が人びとの社会移動を大規模に、あるいはおしなべて左右するという見方自体、慎重であるべきだ。建設業に拾われたH・Tがそうであるように、1960年から70年にかけては建設業従事者が約200人増加し、2010年まで300-400人で安定的に推移していた（図1）。進学・就職による移動以降、1946-55年生まれが約50人、1961-80年生まれが約30人でいったん落ち着くのも、そうした建設業の安定性と無縁ではあるまい。だが、H・Tの世代からN・Mの上の世代までは、K・Sら年長世代とは異なって、加齢にともない、再び村を後にすることがなかったのも注目できる。同時に、まさに「打習」や「部活」の第1世代N・Mたち以下が、「打習」や「部活」という場、あるいはそれを取り巻く状況の成熟と関わるかたちで、40代、あるいは30代で再び村を出ざるをえなくなっているのもまた、現実なのである。

ここでは2012年以降の佐井村での、祭礼・芸能を起点とした人びととの関わりをアクション・リサーチとして捉え返しながらか、アクション・リサーチの方法論上の焦点でもある人びとの小集団あるいはコミュニティのありようについて、川瀬（2019）の「韻律」概念を導きの糸としつつ考えてきた。

まず、アクション・リサーチの条件である当事者と研究者、現場と観察者との相互作用については、まさに、ここで当事者自身が自らの小集団の核心にあると語る、「ゆるくなさ」をめぐる衝突から出発した。観察者の側でも当初から、この言葉の重要性は感受され、だからこそ、「ゆるくなさ」の背景にあるようにうかがえる、人口減少をポジティブに捉え返し、人びとが「ゆるくなさ」と語りながら続ける営みを、持続のための工夫などと位置づけ直していた。しかし、それは「ゆるくなさ」を字義どおりに受けとめる、あるいは、この言葉をたんに意味を表示し伝達するだけのものとして捉える、限定的な認識に立つものであった。衝突が生まれたのもそのためであった。

その衝突を乗り越えた契機の1つは、学生による「空気感」という概念化であった。これにより「ゆるくなさ」は、観察者も含む、そこに関わる人びとの間の関係性の様態の1つとして相対化された。この「空気感」という概念はまさに「韻律」と類比しうる奥行きを持っている。人びとは互いに、言葉の交わり方だけでなく話題の出し方、あるいは座り方など、一連のふるまい一つひとつで、合う／合わないを見極めながら、互いに関係性を取り結び、深めるのかを見定めていた。このアクション・リサーチでは、川瀬（2019）の「韻律」とは異なり、あえて異なる複数の「空気感」を対象

化し言語化していた点で、人びとがたしかに互いのふるまいを通じて関係性を紡ぐ、そうした小集団のありようがありうることを示しえたと言える。だが同時にそうした対象化は、アクション・リサーチで取り結ばれる現場と観察者、あるいは現場のなかに、自らが紡いでいる関係性に対する疑念を喚起する危険と隣り合ってもいた。

そのうえで、あえていったん相対化する立場から距離を取り、再度「ゆるくなさ」に立ち戻った。すると、その「韻律」が、通年の、また年々のふるまいの積み重ねによって自覚化されることがわかった。これは、即興性が強調される川瀬（2019）の「韻律」ではむしろ注目されにくくなっていたことだが、「韻律」概念を用いるうえでは欠かせない視点と考えられる。特に「空気感」がスナップショットで切り取られるものであるのに対し、あえて「韻律」を用いるとすれば、より不可欠な視点と見るべきだ。

同時に、「ゆるくなさ」と不可分な「空気感／韻律」として「おもしろみ」という人びとの常套句にも気づかされた。この「おもしろみ」の気づきは、1つには一時的な観察者から、2度、3度と訪れ、まとまった時間を過ごす、現場との関係性の積み重ねによるものであった。だがもう1つ重要なのは、「ゆるくなさ」が外部に対する意図的な語り口であることに、「語り部」が宛がわれ、かつそれが「語りすぎる語り部」であることともに気づかされた点であった。

この「おもしろみ」が「ゆるくなさ」と不可分な対であるという認識は、初発から「ゆるくなさ」という言葉につきまっていた奥行き、すなわち「ゆるくないが止めたくない」といった一見、矛盾したふるまいの理解、さらに言えば、それを理解し共有したときに互いの距離が格段に縮まるといった、この言葉の働きを見通すのに不可欠なものであった。たしかに、これまでの研究でも「形／わざ」の不可分な対がすでに取り出され（生田・北村2011）、熟練の観察者ならば直接に「「楽しさ」の共同体」と看破する（菅原2010）。だが「ゆるくなさ／おもしろみ」は、「形／わざ」といった分析言語である以上にそれ自身が具体的な「韻律」として、ここでの現場と観察者を取り結ばせるものであり、「楽しさ」が核心にあるとしても、それがあえて「ゆるくなさ」のような対語とともに語られることもまた、ここで取り結ばれた人びとの小集団のありようを裏書きするものだと言えよう。

私たちはその後、「ゆるくないがおもしろい」営みの象徴として「打習」という場に誘われた。この場は同時に、当事者にとっても、まだその「韻律」を十分に分かちあっていない子どもたち、あるいは大人たちを誘う重要な機会であった。それは、ここでの「ゆるくなさ」のように、反復的（短周期）でしかも濃密（高強度）な、言わばハイテンションな「韻律」が、実際に関係性を取り結び紡ぎ続ける背景を探るのに欠かせない探究であった。結果として学生たちはそこに「流派」という、自ら選び取る契機の働きを見出した。それはこれまでの身体実践をめぐる研究でも見いだされていた重要な機制（倉島2007）だと言える。

しかしここで謎が残される。現場の人びと自身、決してこの「流派」の働きに気づいていないわけではないにもかかわらず、彼（ら）はそれを廃止した。おそらくそれは、この場に新たな人びとを誘う以上に、今ある場の持続を願った決断だと考えられる。ただ、一歩引いてみればそれは、学校教育のプログラムとして築かれた基盤に依存する、ある種の「制度化の罫」にも見え、今後の行く末が危惧される。

他方、「打習」という場に着眼することで、アクション・リサーチの視野は「部活」という場にも開かれた。それは芸能研究や教育研究といった研究領域の横断を果たし、この「ゆるくないがおもしろい」世界を生きてきた人びとの現実により迫るものとなった。実際に「部活」は「打習」という場とほぼ同じ1980年代に立ち上がり、その第1世代が2000年代から自ら村に戻って「部活」という場をさらにいっそう充実させはじめていた。これらの事実は「打習」という場だけを見ては十分、展望できなかった知見、すなわち、この村では戦後一貫して常態であった、村の外に出、また時として戻るといった社会移動と、私たちが村を訪れたときに共有可能な場、また、そこでの関係性との関連が、如何なるものかを示唆するものであった。こうした社会移動と場を一貫して捉える概念として、学生たちは「フック“hook”」を提起した。それは、コミュニティの閉鎖性・排他性を指弾する“peg”（Bauman2001）を想起させるものであった。だが、たしかに「ゆるくないがおもしろい」この場、

この場を通過した人びとの移動の軌跡を表現するのに相応しかった。

5年の時を経て顧みれば、満ち足りてはいたが緊張の連続であった人びととの関わりも、このように、ある程度、首尾一貫して見えるアクション・リサーチに記し直すこともできる。だが同時に、「流派」を廃した「打習」という場は、危惧されたように現実に、その場に集う人びとの数がさらに半減した。「部活」という場も、グローバル化するトーナメント・システムにより活況を呈しただけでなく、人びとだけでなく場もまた移動を余儀なくされ、人に効果を及ぼした「フック」が、場にもどのようなかたちで想定しうるのか、杳として見通せない。

人口統計と対照させても、たしかに1980年代に成立し持続してきた「打習」と「部活」という場は、「ゆるくなさ／おもしろみ」という「韻律」を介して、1950年代後半から1960年代、この村で生まれた人びとに、「フック」として働いていたように見える。だが、その働きはまさにその第1世代が村に戻ってきて場を自ら育みはじめた2000年代以降、徐々に薄れてきているのか、第1世代自身、すなわち1970年代生まれの再流出が目立ち始めている。

私たちは2010年代前半、そのように「ゆるくなさ／おもしろみ」の「韻律」に結ばれる場の、まさに最も成熟した時期に立ち会った。そして今、その場が音を立てて崩れるようにするのをまた、目にしようとしているのである。

文献

- 青森県教育委員会 (1996)『青森県民俗芸能緊急調査報告書』
- Bauman, Zygmunt (2001) *Community, Polity*.
- 葉山茂 (2017)『現代日本漁業誌』昭和堂
- 平井太郎 (2017)『ふだん着の地域づくりワークショップ』筑波書房
- 編著 (2019)『ポスト地方創生』弘前大学出版会
- (2020)「ワークショップにおける「参加の実質化」をめぐる」『農村計画学会誌』39 (論文特集号): 253-262
- 弘前大学人文学部宗教学・民俗学研究室 (2001)『佐井の祭礼と民俗』
- ひろだりサーチ (2012)『佐井村箭根森八幡宮祭典 歴史・山車の様式』佐井村商工会
- 生田久美子・北村勝朗編著 (2011)『わざ言語』慶応義塾大学出版会
- 金井壽宏ほか (2010) 組織エスノグラフィー、有斐閣
- 川瀬由高 (2019)『共同体なき社会の韻律』弘文堂
- 倉島哲 (2007)『身体技法と社会学的認識』世界思想社
- Lave, J. and Wenger, E. (1991=1993)『状況に埋め込まれた学習』産業図書
- Lazarsfeld, P. and J.G. Reitz (1975) *An Introduction to The Applied Sociology*, Elsevier.
- Lewin, K. (1948, 1997) *Resolving Social Conflicts*, APA.
- 丸山康司著 (2006)『サルと人間の環境問題』昭和堂
- Mayo, Elton (1945) *Social Problems of an Industrial Civilization*, Boston: Division of Research, Graduate School of Business Administration, Harvard University, p. 72
- 宮本常一 (1971)『宮本常一著作集10』未来社
- 宮内泰介 (2017)『人びとの自然再生』岩波書店
- 長澤壮平 (2007)『早池峰岳神楽』岩田書院
- 中野紀和 (2007)『博多祇園太鼓の都市人類学』古近書院
- 中澤篤史 (2014)『運動部活動の戦後と現在』青弓社
- 大石泰夫 (2007)『芸能の〈伝承現場〉論』ひつじ書房
- 盛山和夫 (2013)『社会学的方法的立場』東京大学出版会
- (2015)「社会保障改革問題に関して社会学は何ができるか」『社会学評論』262: 172-187
- Stringer, Ernest (2014) *Action Research*, Sage.
- 菅豊 (2013)『「新しい野の学問」の時代へ』岩波書店
- 菅原和孝 (2010)『ことばと身体』講談社
- 武田俊輔 (2019)『commonsとしての都市祭礼』新曜社
- 田中重好 (2007)『共同性の地域社会学』ハーベスト社